桐壺の巻「参りては」の疑義

清水泰

「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになむ』とないしのすけの奏し給ひしを、物思ひ知らぬ心地にもげにこそいと忍びがたかりけれ」とて、ややためらひて仰せごと伝へ聞ゆ。

右は桐壺の更衣の死後、更衣の母のところへ、帝の使として行つた命婦との会話の一部分である。更衣の母は、年とつて娘におくれ今まで世に生き残つているのが恨めしいのに、こうした露深い蓬生の宿をお尋ね下され御目にかかるのも恥ずかしいことである。と言つて泣くのに対して、命婦が述べる言葉である。右の文中の「　」『　』などは、現在出版されている多くの源氏物語によつた。「　」のなかは命婦の言葉であり、『　』のなかは典侍(ないしのすけ)が帝に奏上した言葉を、さらにここで命婦が繰りかえして言うた言葉である。以上が現在行われている解釈によるものである。なおはつきりさせるために、一二註釈書を見ると、あるものは「参りては」に傍註して「こちらに参上して見ると」としてあり、また他のものは「お邸に上つてみますと一入、唯もう何ともお気の毒で、御慰め申上げやうもなく、お訪ね致す私まで引入れられて、魂も消えてしまひさうな気がしました」というように、このところを口訳しているのである。「　」『　』などは後世の学者が、どれだけが誰の言葉であるかを明らかにするために施こしたものであることは言うまでもない。わたくしは、ここを次のようにして解釈してはどうかと思うのである。

「参りては『いとど心苦しう、心肝もつくるやうになむ』とないしのすけの奏し給ひしを、思ひ給へ知らぬ心地にもげにこそいと忍びがたかりけれ」とて、ややためらひて仰せごと伝へ聞ゆ。

としてみたいのである。「参りては」というのは、典侍が、更衣の母の家から宮中即ち帝のもとに戻つてきた意味に考えたいのである。したがつて少し順序をかえれば、

「『いとど心苦しう、心肝もつくるやうになむ』と、参りてないし

のすけの奏し給ひしを……」……。

となるのである。「参りては」の「は」という助詞にひかれた諸注の解釈とも思うが「は」があっても自分の解釈にさしたる影響はないと思うのである。

一体「まゐる」という言葉は「まへにゐる」の意だと私は解する。「まへ」は「御まへ」であろう。高貴なかたの御まへをさすのである。「御まへ」の「ま」は「め」（目）であると思われるが「まゐる」の「ま」はすぐに目を意味するのではなくて「まへ」を略しているのだと思う。それ故「まゐる」というのは、自分より高貴のかたのまへに居ることであり、高貴のかたのところに行くことである。宮中に行くことは一も二もなく「参る」であることは勿論で、参内のことはみな「参る」という言葉が使われている。主上のところにまゐるのでなくても、院のところへ行く場合も「参る」である。すなわち主上、院、皇后、中宮などのところへ行くのはみな「参る」である。なお中宮に準じた女のかたのところへ行くことはみな「参る」が用いられる、その他自分より上位にある人のところへ行くことは「参る」という言葉が使われている。「煙にたぐひて慕ひ参りなむ」というような場合は、自分よりも目上の人の死を悲しんでそのかたのところへ参りたい意である。「大学に参り」という用例もうなずかれることである。土佐日記のなかに「この歌ぬし、またまからずといひてたちぬ」という書きかたをしているのがあるが、この歌主というのは歌も満足に作れず、謂わば田舎の無学の人として記されている者である。「また参らむといひて」といはねばならぬところを、田舎方言をそのまま、しかも「参る」という言葉を使うべきを誤っているのである。行くことを行かずといったり、食うことを食はずという例である。田中大秀もすでに「此男、貴賤の詞づかひをもしらで、なめしき事いへるをとがめ、其方言をあざけりて、殊更に二所まで書顕し、此男は、こざかしくて、今世に云、きいた風いき過ものなるを笑たるなり」といっているのである。

また地方から京へゆく場合も「参る」である。けれどもこの場合は多く「参り来る」という言葉のつずまった「まうで」が使われているようである。長谷寺とか、叡山などへゆくことは、京からゆくのではあるが、社寺などへゆく場合であるので「参る」「まうづ」を使っている。「昨日山へまかり上りにけり」とか「あらぬ世の心地してまかり上りたりしを」或は「甲斐の守にて侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける」というような例を見る場合もあるが、このような「まかり」は接頭語と見てよいと思う。或は自分を卑下して「まかり」を使ったので、山に或は京に上った意味である。そのような「まかり」は「東

の五条わたりに人を知りおきてまかり通ひけり」とか「その家のあたりをまかりありきける折」などの場合も見ることが出来る。また古今集の「惟喬のみこの許にまかりかよひけるを、かしらおろして、小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとて、まかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひてかのむろにまかりいたりて、をがみけるに、つれ〴〵として、いと物悲しくて、帰りまうできてよみておくりける」という「わすれては夢かとぞ思ふ」の歌の詞書は、伊勢物語にも出ている同じ歌のところの記事と同一内容といつてよいのであるが、伊勢物語の方には「まかり」という言葉は一つも用いていない。この古今集の題の詞のうち「まかりたりけるに」は、親王のところへ行くのであるからまゐりたりけるに」とあるべきであると思う。「まかり」を生かして説うとすると、京の郊外小野へゆくのだから「まかり」を使つているのだとせねばならぬが少し無理のようだ。或は卑下した意味にみるか。

地方から京へゆく場合は「参る」を用いると言つたが、その反対に京から地方へゆく場合は、みな「まかる」を使つている。狩や紅葉狩などにゆく場合は、京の郊外とか、やや京から離れたところに行くことになるであろうから、やはり「まかる」である。

月世界とか蓬莱からこの国へくる場合は「参る」であり、死してこの世を去るは「まかる」であつて、身まかるのである。

なほ「参る」は「御くだものばかりまゐれり」「御湯まゐれ」「御かはらけ参り給ふ」というように用いられ、或は「御格子まゐりなむ」「おほとなぶら参らせ給ひて」「紙そくもて参り」のような用例のあることは、よく知るところである。

以上「参る」の用例について述べたのであるが、再び桐壺の巻にもどつて考えてみるに、ここの「参りては」というのは、典侍が宮中に戻つて、すなはち帝に御目にかかつて奏上した意意味にみたい。典侍が更衣の母のところに参上したと見るのはどうかと思う。従来の説では典侍が更衣のところへ来て更衣と向いあつて言つているのだからと説くのであろうが、私にはこれが疑問に思うところである。典侍は更衣の母のところへ私にきたのではない。帝の使者として公に来たのであることを思わねばならないのである。「参る」「まかる」については、とくに「まかる」は鎌倉時代以降随分その用法もかわつているのをみることもある。